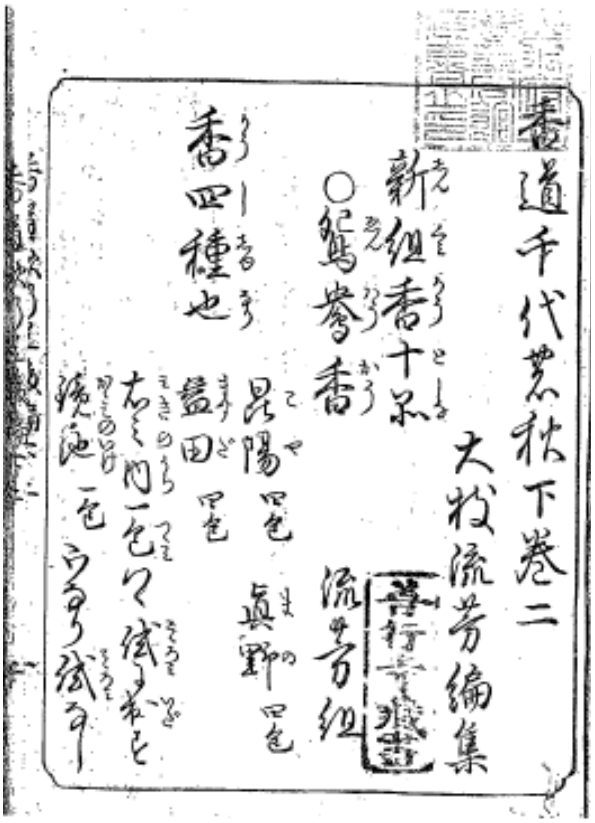


香道千代農秋下巻二

大枝流芳編集

新組香十品

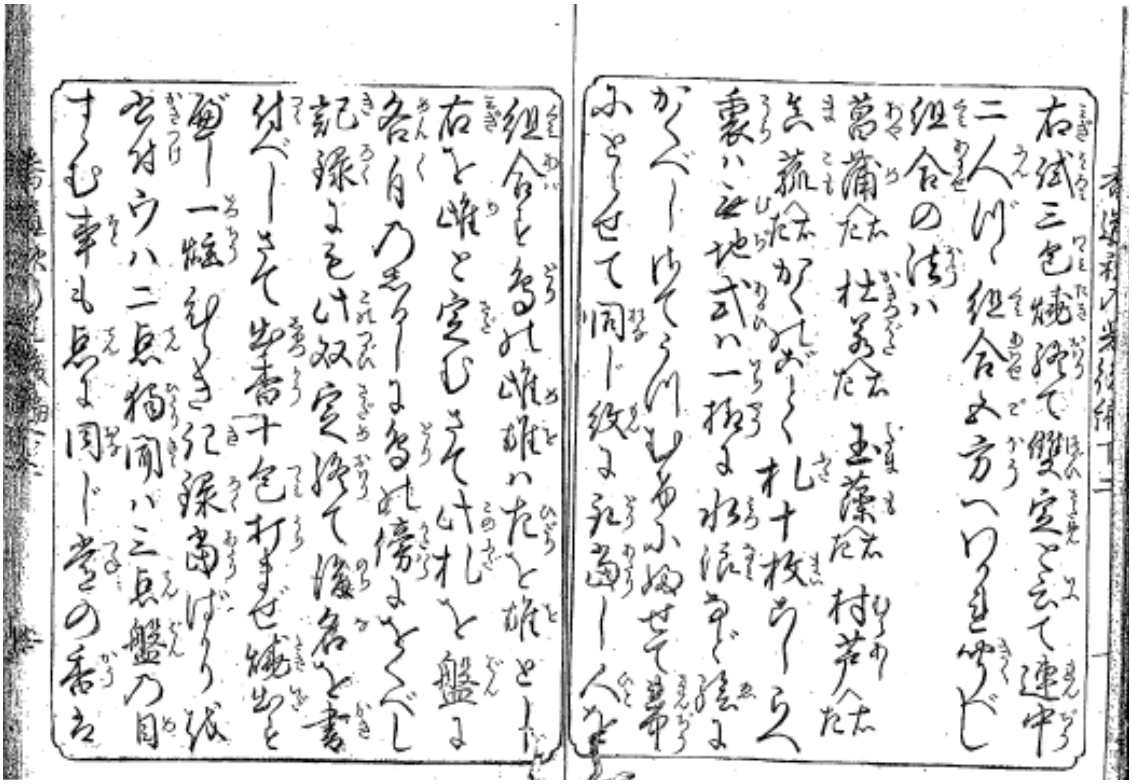
○鴛鴦香（えんおうこう）　流芳組

香四種也

「昆陽（こや）」四包　「眞野」四包　「益田」四包

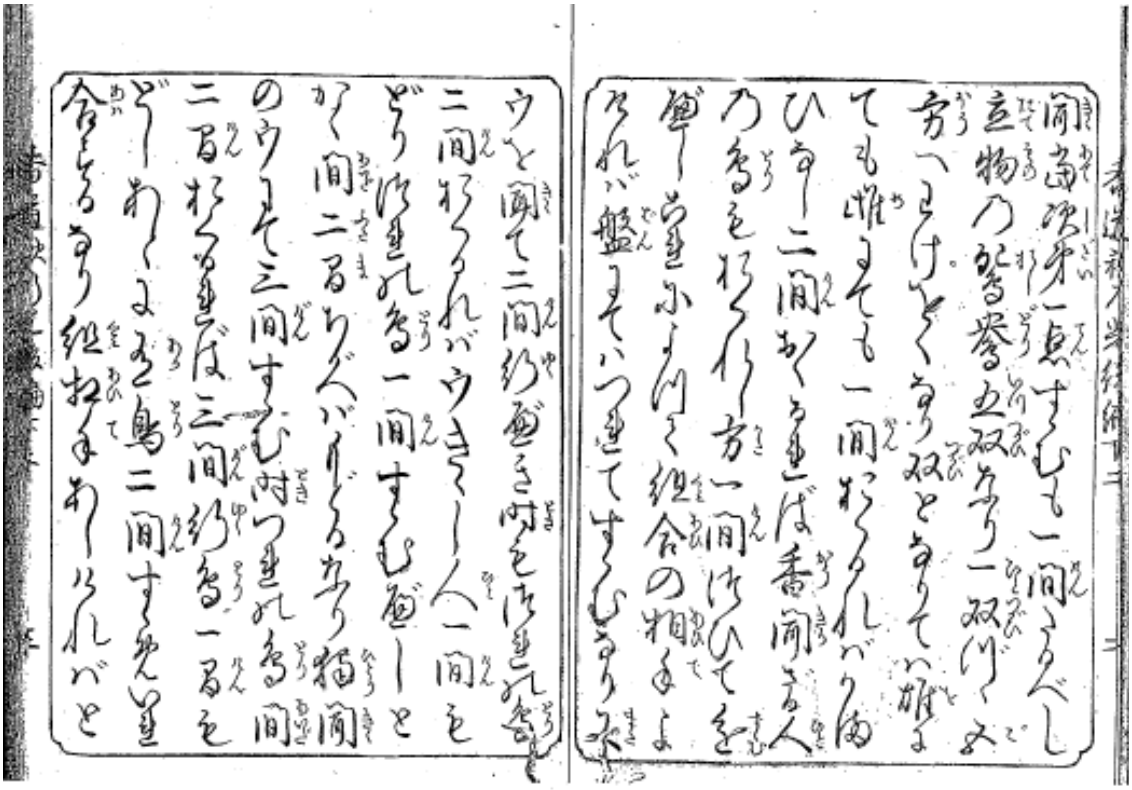
右の内一包ずつ試みに出す。

「鏡池」一包　ウなり。試みなし。



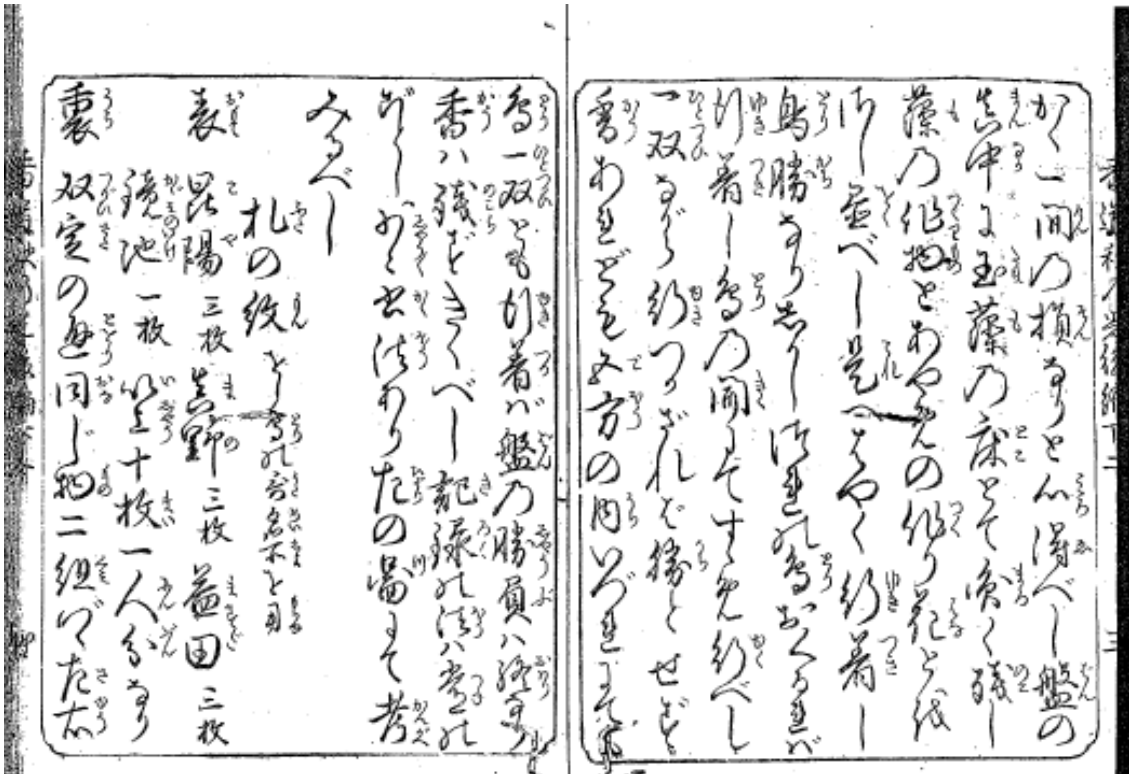
右試三包焼き終りて、「雙定(つがいさだめ)」と云うて、連中
二人ずつ組み合わせ、五方へわかれ聞くべし。
組み合せの法は
「菖蒲(あやめ)」左右　「杜若(かきつばた)」左右　「玉藻(たまも)」左右　「村芦(むらあし)」左右　「真菰(まこも)」左右
かくのごとく札十枚こしらえ、
裏は無地、或は一様に水波など絵に
かくべし。さて、うつむけにふせて連中
にとらせて、同じ紋に取り当たりし人を

組み合わす。鳥の雌雄(めお)は、左を「雄」とし、
右を「雌」と定む。さて、此の札を盤に
各自のしるしに鳥の傍らにおくべし。
記録にも、此の双定(つがいさだめ)終りて後、名を書き
付くべし。さて、出香十包打ちまぜ焼き出す
べし。一炷ひらき、記録当たりばかりを
書き付け、「ウ」は二点、独聞は三点、盤の目
すすむ事も点に同じ。常の香は



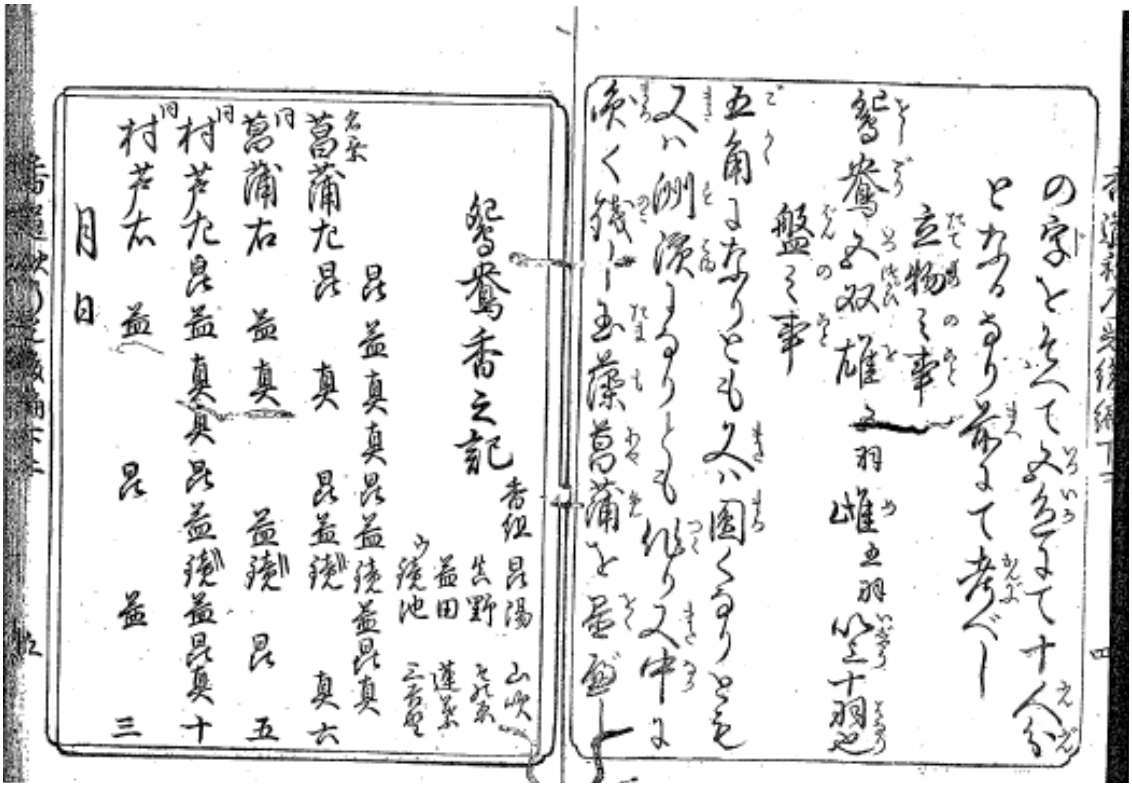
聞き当て次第一点すすむも一間たるべし。立物の「鴛鴦」、五双なり。一双ずつ五方へわけおくなり。双となりては雄にても雌にても一間おくるれば、かまいなし。二間おくるれば、香聞かざる人の鳥もおくれし方、一間ついて(付いて)進むべし。これによって組合の相手よければ、盤にては、つれ(連れ)ですすむなり。また、

「ウ」を聞きて二間行くべき時も、つれの鳥二間おくるれば、「ウ」ききし人、一間もどり、つれの鳥一間進むべし。かく、間(あいだ)二間(ふたま)ちがえばもどるなり。独聞の「ウ」にて三間すすむ時、つれの鳥、間二間おくるれば、三間行く鳥、一間もどし、あとに有る鳥、二間すすめ、いれ合わするなり。組相手あしければ、と



かく一間の損なりと心得べし。盤の
真中に「玉藻の床」とて、圓(まろ)く残し、
藻の作り物と「あやめ」の作り花とを
さし置くべし。是へはやく行き着きし
鳥、「勝」なり。しかし、つれの鳥おくるれば、
行き着きし鳥の聞きにてすすめ行くべし。
一双ながら行きつかざれば、「勝」とせず。
香あれども、五方の内いずれにても
鳥一双とも行き着かば、「盤の勝負」は終りなり。
香は残らずきくべし。記録の法は常の
ごとし、少々書く法あり。左の図にて考え
みるべし。

札の紋（おし鳥の歌名所を用ゆ）
表「昆陽」三枚「眞野」三枚「益田」三枚
「鏡池(かがみのいけ)」一枚　以上十枚一人分なり。
裏　双定の通り、同じ物二組ずつ、左右



の字をそえて五色にて十人分
となるなり。前にて考うべし。

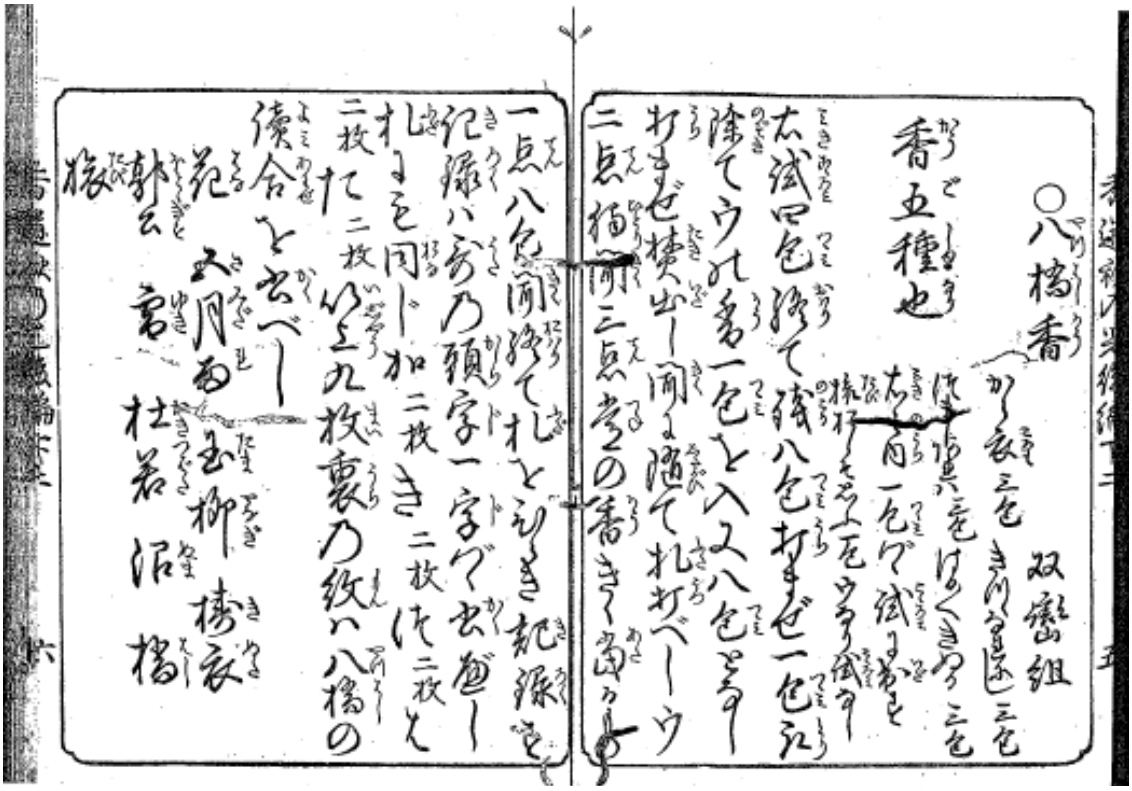
立物の事

「鴛鴦」五双　（「雄」五羽　「雌」五羽）以上十羽なり。

盤の事

五角になりとも、または、園（まる）くなりとも、
または、洲浜になりとも作り、また中に
圓く残し、「玉藻」、「菖蒲」を置くべし。

［鴛鴦香之記］



○八橋香（やつはしこう）　双巒組

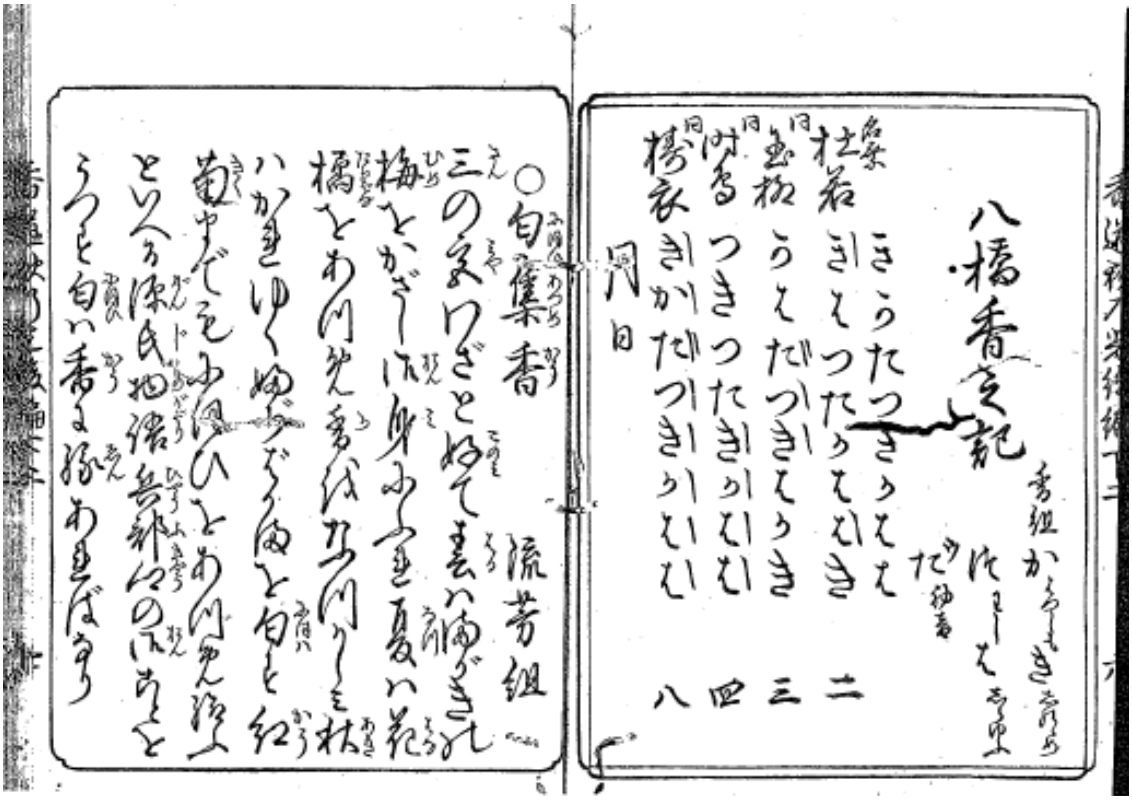
香五種也

「から衣」三包　「きつつなれにし」三包
「つましあれば」三包　「はるばるきぬる」三包
右の内一包ずつ試みに出す。
「旅をしぞ思う」一包　ウなり。試みなし。

右試み四包終りて、残る八包打ちまぜ、一包取り除きて、「ウ」の香一包を入れ、また八包となし打ちまぜ、焚き出だし、聞きに随いて札打つべし。「ウ」二点、独聞三点、常の香きき当たるもの

一点。八包聞き終りて札をひらき記録す。記録は、歌の頭字（かしらじ）一字ずつ書くべし。札にも同じ、「か」二枚、「き」二枚、「つ」二枚、「は」二枚、「た」二（一）枚、以上九枚。裏の紋は「八橋」の読み合せを書くべし。

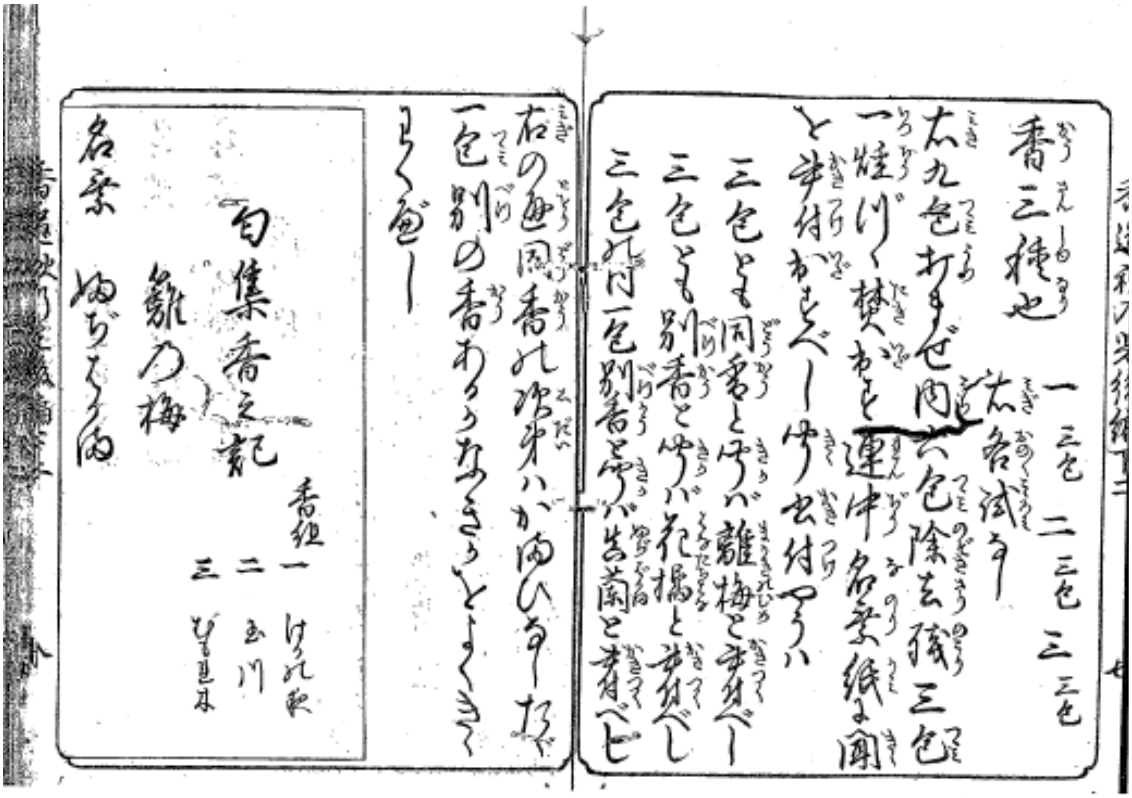
「花」「五月雨」「玉柳」「檮衣（きぬた）」
「郭公（ほととぎす）」「雪」「杜若（かきつばた）」「沼」「橋」
「旅」



［八橋香之記］

○匂集香（においあつめこう）　流芳組

三の宮わざと好みて、春はまがきの
梅をかざし、御身にふれ、夏は花
橘をあつめ、香をなつかしみ、秋
はかれ（枯）ゆくふじばかまを匂わす。紅
菊までもにおいをあつめ給う
といえる。『源氏物語』兵部卿の御ことを
うつす。匂いは、香に縁あればなり。



香三種也

「一」三包　「二」三包　「三」三包

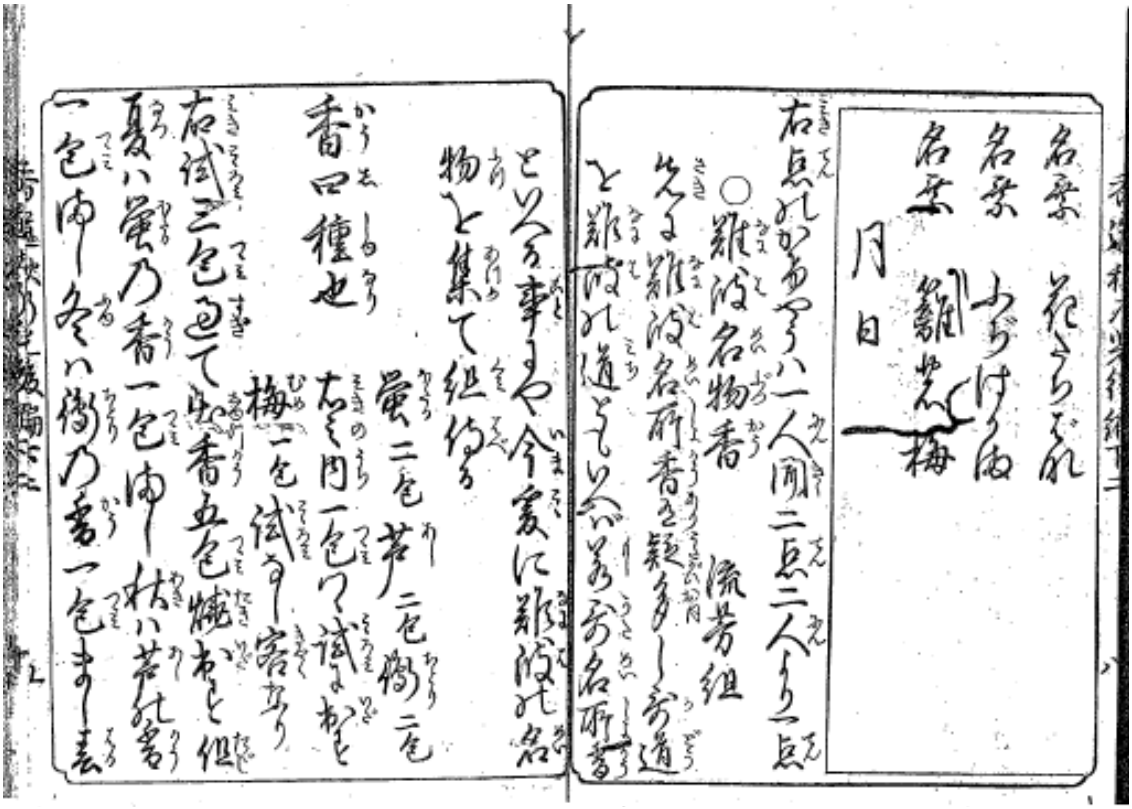
右各々試みなし。

右九包打ちまぜ、内六包除き去り、残り三包、一炷ずつ焚き出す。連中、名乗紙に聞きを書き付け出すべし。聞き書き付けようは

三包とも同香と聞かば「籬梅（まがきのうめ）」と書き付くべし。
三包とも別香と聞かば「花橘（はなたちばな）」と書き付くべし。
三包の内、一包別香と聞かば「真蘭（ふじばかま）」と書き付くべし。

右の通り、同香の次第はかまいなし。ただ一包別の香あるかなきかをよくききわくべし。

[句集香之記]



右、点のかけようは、一人聞二点、二人より一点。

○難波名物香（なにわめいぶつこう）　流芳組

先に「難波名所香」あり、疑い多し。歌道を難波の道ともいえば、もし「歌名所香」といえる事にや。今ここに難波の名物を集めて組み侍る。

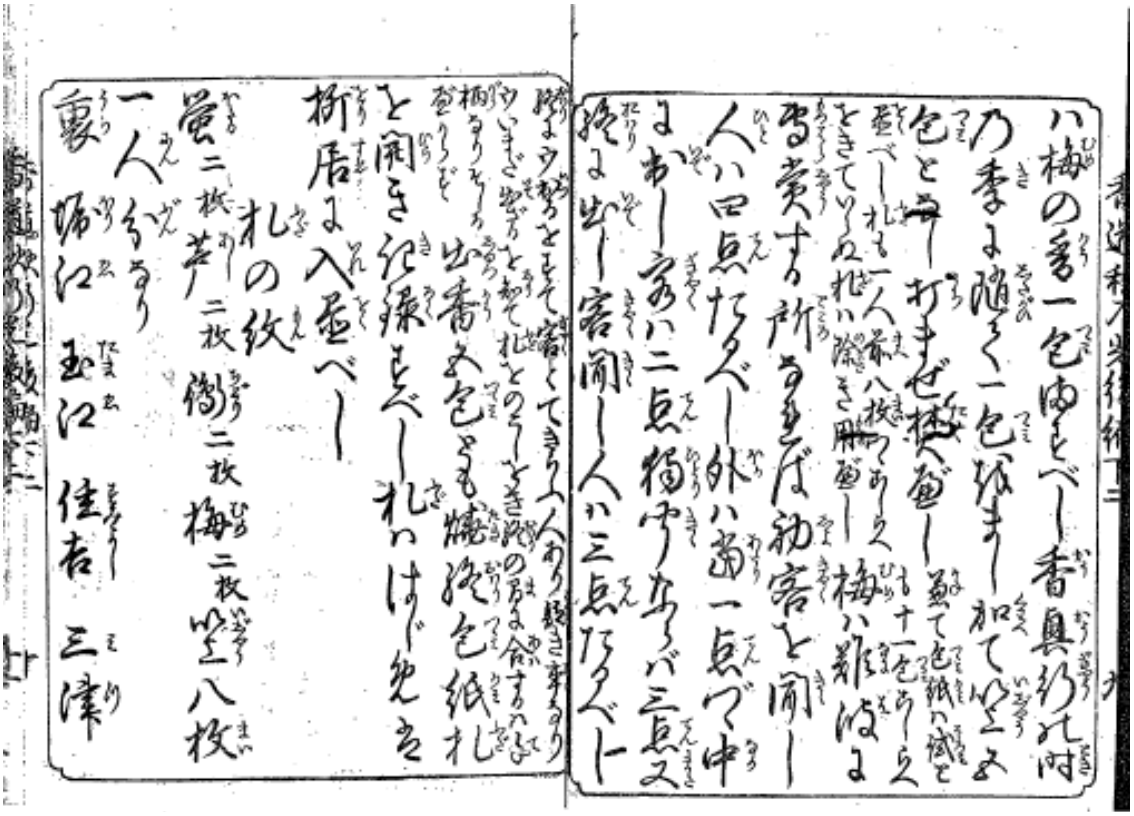
香四種也

「蛍」二包　「芦」二包　「衛（ちどり）」二包

右の内一包ずつ試みに出す。

「梅」一包　試みなし。客なり。

右試み三包過ぎて、出香五包焼き出す。但し、夏は「蛍」の香一包まし（増）、秋は「芦」の香一包まし、冬は「衛」の香一包まし、春

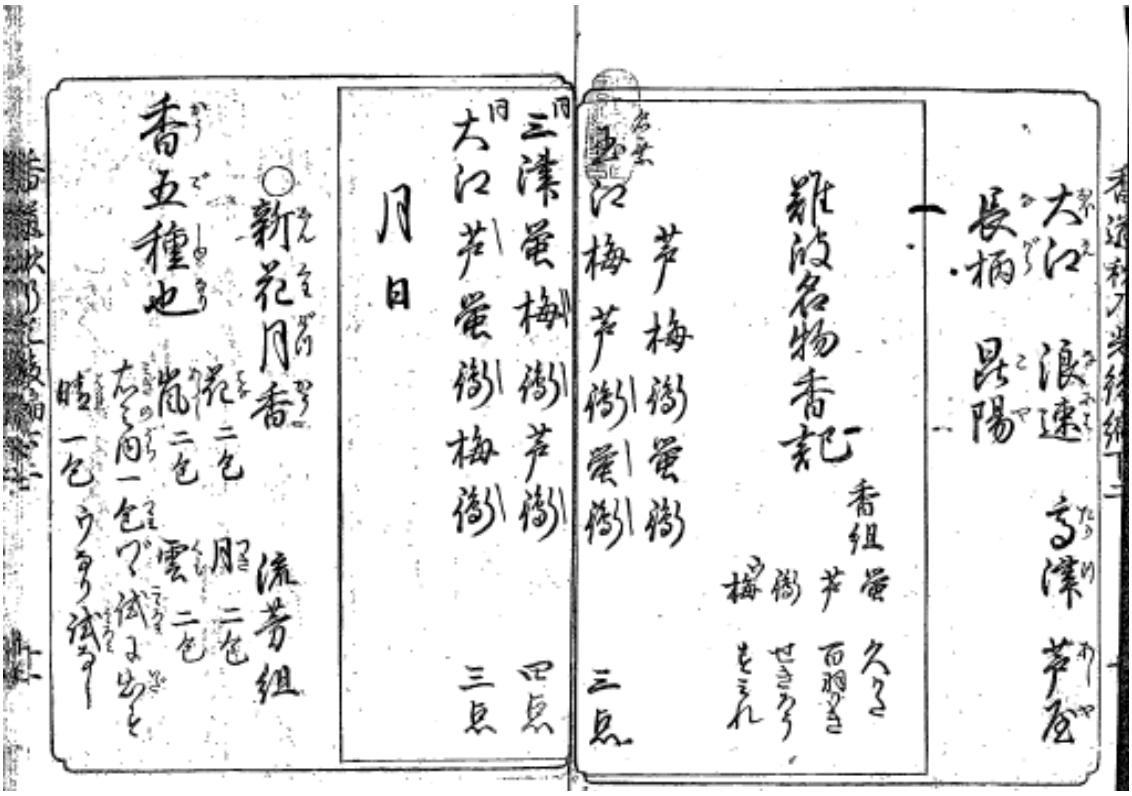


は「梅」の香一包ますべし。香興行の時
の季に随いて一包を増し加えて、以上五
包となし、打ちまぜ焚くべし。（兼ねて包紙は試みとも十一包こし
らえ置くべし。札も一人前、八枚ずつこしらえおきて、いらぬ札は
除き用ゆべし。）「梅」は難波に
専ら賞する所なれば、初客を聞きし
人は四点たるべし。外は当たり一点ずつ中
に出でし、「客」は二点、独聞ならば三点。また
終りに出でし「客」聞きし人は三点たるべし。

（終りに「ウ」出ずるを「すて客」とてきらう人あり。疑わしきことな
り。ウいまだ出でざるを知りて、札をのこしおき、終りの間に合わす
るは手柄なり。そしるべからず。）出香五包とも焼き終り、包紙、札
を開き、記録すべし。札は、はじめは
折居に入れ置くべし。

札の紋

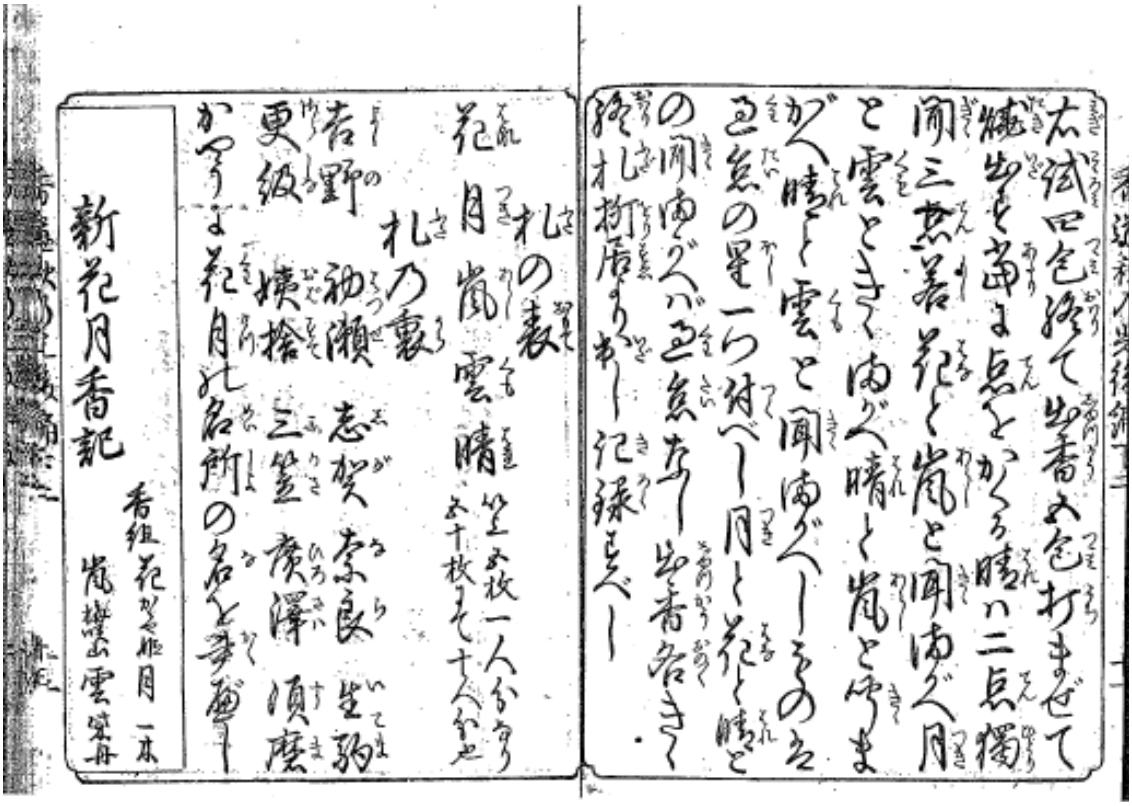
「蛍」二枚　「芦」二枚　「衡」二枚　「梅」二枚　以上八枚
一人分なり。
裏「堀江」「玉江」「住吉」「三津」



「大江」「浪速」「高津」「芦屋」
「長柄」「昆陽」

［難波名物香］

○新花月香（しんかげつこう）　流芳組
香五種也
「花」二包　「月」二包
「嵐」二包　「雲」二包
右の内一包ずつ試みに出す。
「晴（はれ）」一包　ウなり。試みなし。



右試み四包終りて、出香五包打ちまぜて
焼き出す。当たりに点をかくる。「晴」は二点、独
聞三点。もし「花」と「嵐」と聞きまがえ、「月」
と「雲」とききまがえ、「晴」と「嵐」と聞きま
がえ、「晴」と「雲」と聞きまがえしものは、
「過怠の星」一つ付くべし。「月」と「花」と「晴」と
の聞きまがえば過怠なし。出香各々ききき
終わり、札、折居より出だし、記録すべし。

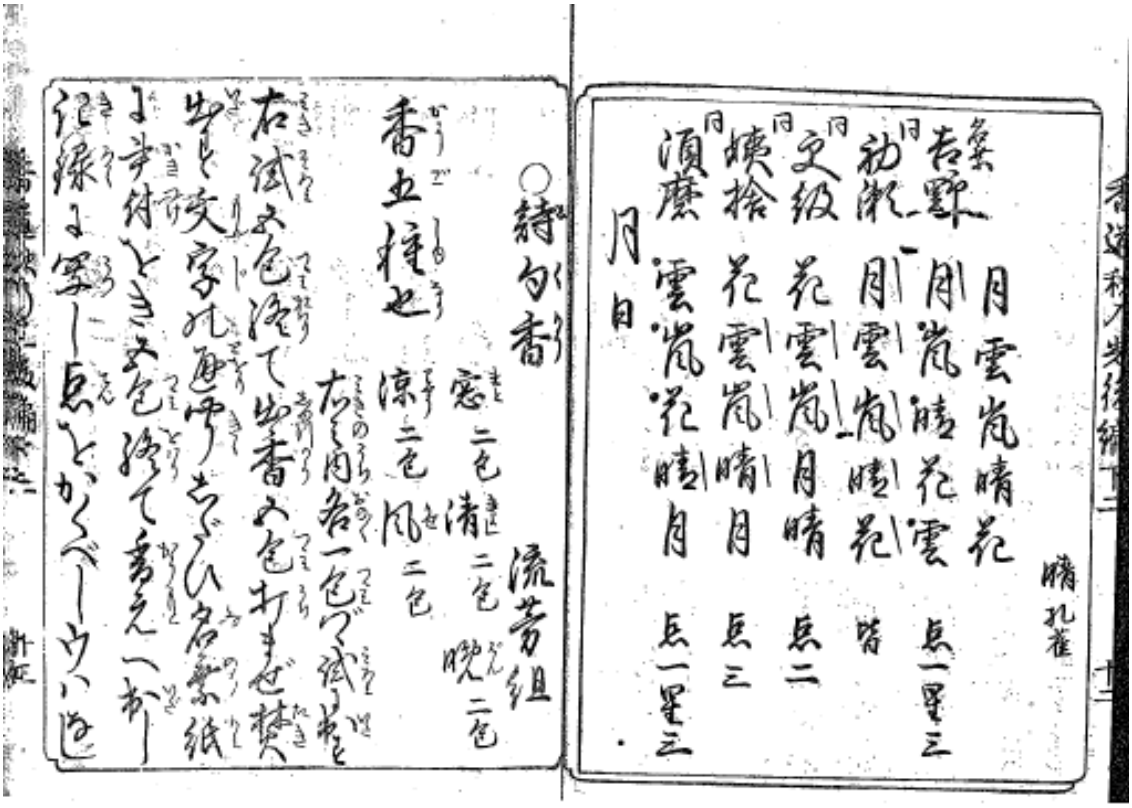
札の表

「花」「月」「嵐」「雲」「晴」以上五枚一人分なり。
五十枚にて十人分なり。

札の裏

「吉野」「初瀬」「志賀」「奈良」「生駒」
「更科」「姨捨(おばすて)」「三笠」「廣澤」「須磨」
かように花月の名所の名を書くべし。

[新花月香記]



○詩句香(しくこう)　流芳組

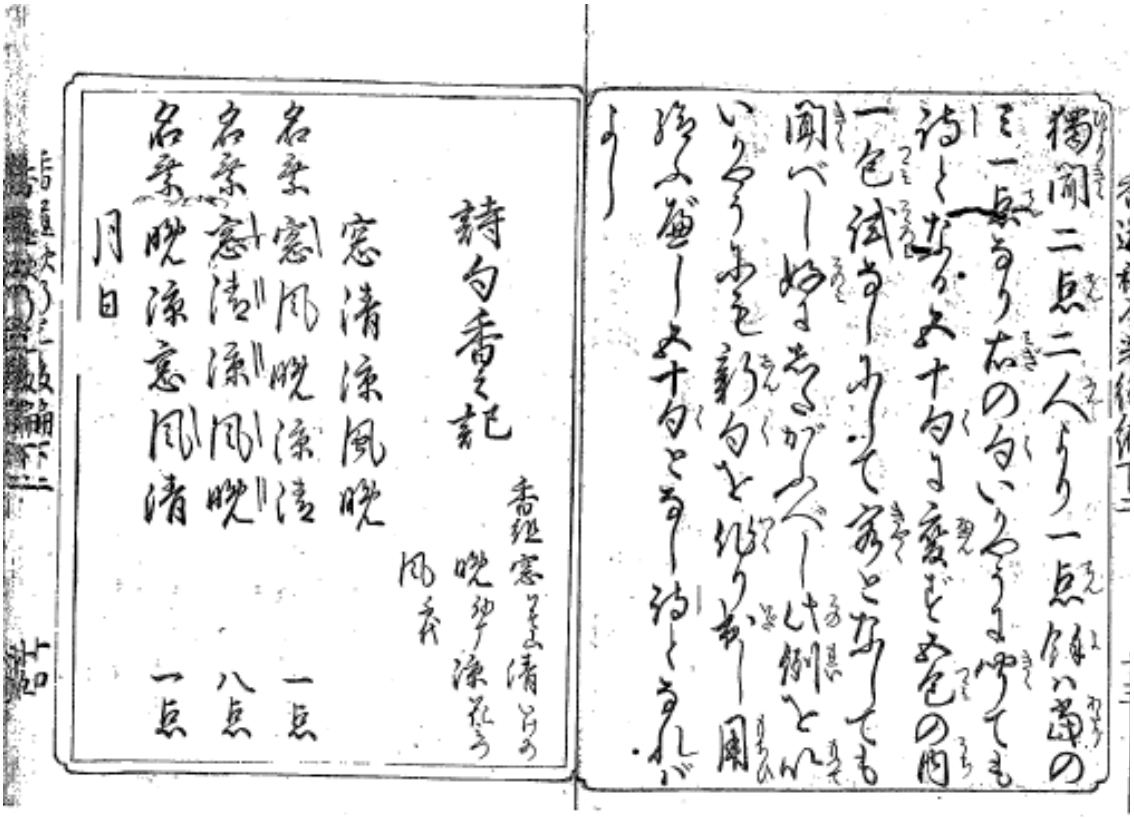
香五種也

「窓」二包　「清(きよし)」二包　「晩」二包

「涼」二包　「風」二包

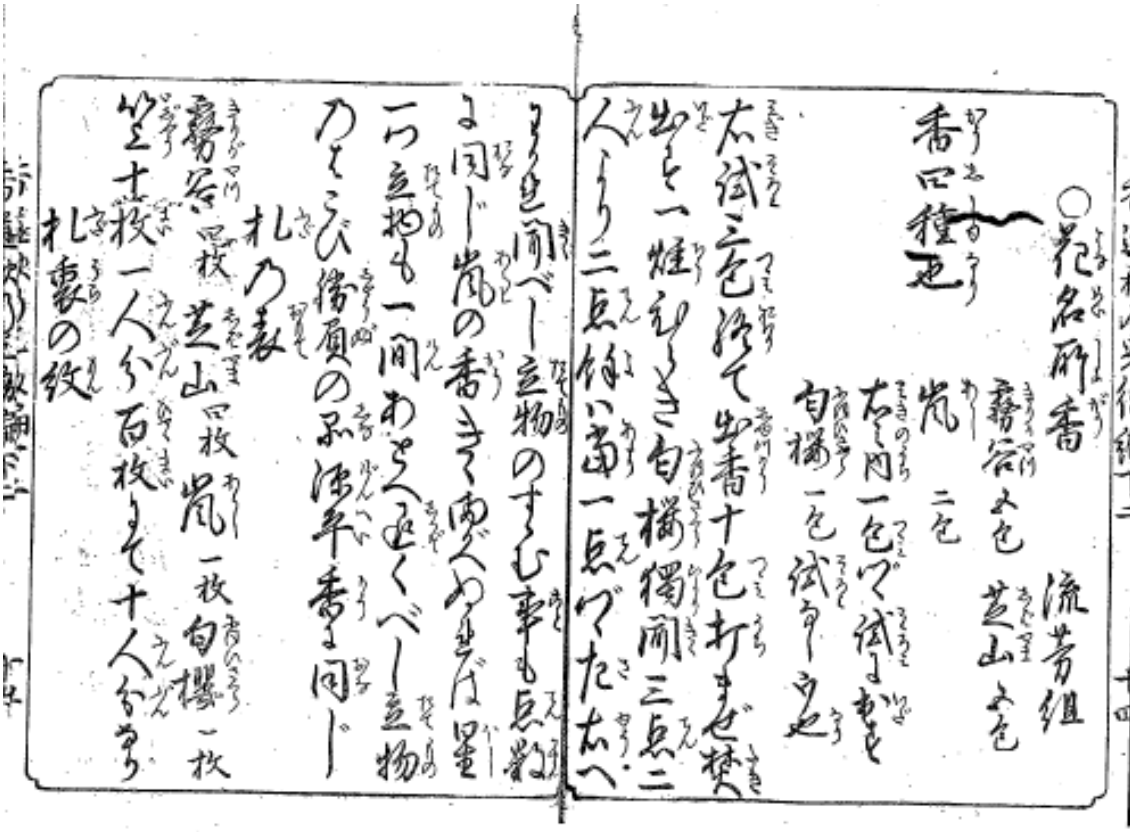
右の内一包ずつ試みに出す。

右試み五包終りて、出香五包打ちまぜ焚き出す。文字の通り聞きしだい、名乗紙に書き付けおき、五包終りて香元へ出だし、記録に写し、点をかくべし。「ウ」はなし。



独聞二点、二人より一点、餘は当たりのみ一点なり。右の句いかように聞きても詩となる五十句に変ず。五包の内一包試みなしにして、「客」となしても聞くべし。好みにしたがうべし。此の例を以ていかようにも新句を作り出し用い給うべし。五十句となし、詩となればよし。

［詩句香之記］



○花名所香（はなめいしょこう）　流芳組

香四種也

「霧谷（きりがやつ）」五包　「芝山」五包　「嵐」二包

右の内一包ずつ試みに出す。

「匂桜（においざくら）」一包　試みなし。ウなり。

右試み三包終りて、出香十包打ちまぜ焚き出す。一炷ひらき。「匂桜」、独聞三点、二人より二点、餘は当たり一点ずつ。左右へわかれ聞くべし。立物のすすむ事も点数に同じ。嵐の香ききまがえぬれば、星一つ、立物も一間あとへ退くべし。立物のはこび、勝負の品、「源平香」に同じ。

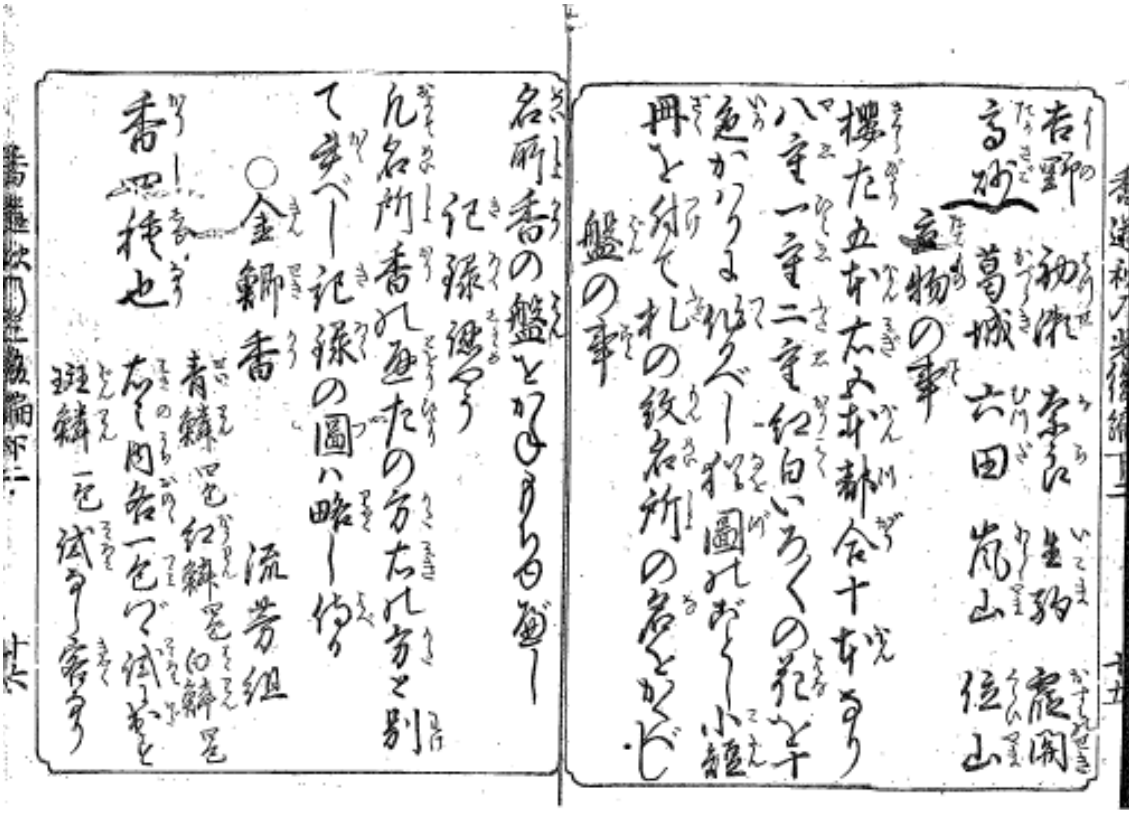
札の表

「霧谷」四枚　「芝山」四枚　「嵐」一枚

「匂桜」一枚

以上十枚一人分、百枚にて十人分なり。

札裏の紋



「吉野」「初瀬」「奈良」「生駒」「霞関（かすみのせき）」
「高砂」「葛城」「六田（むつだ）」「嵐山」「位山（くらいやま）」

立物の事

「桜」左五本 右五本 都合十本なり。
八重、一重、二重、紅白いろいろの花を十色かわりに作るべし。程、図のごとし。小短冊を付けて札の紋、名所の名を書くべし。

盤の事

名所香の盤をかねもちゆ（兼用）べし。

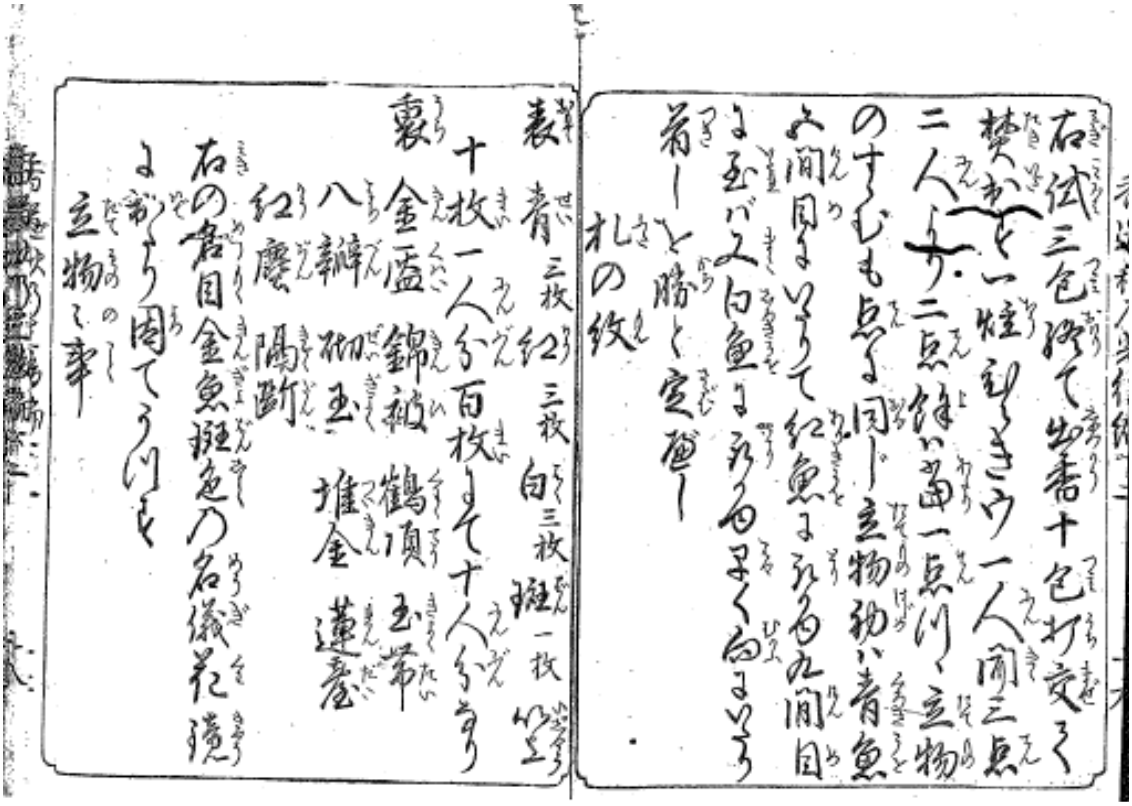
記録認めよう

凡そ、「名所香」の通り、左の方、右の方と別けてかくべし。記録の図は略し侍る。

○金鯽香（きんせきこう） 流芳組

香四種也

「青鱗（せいりん）」四包 「紅鱗（こうりん）」四包
「白鱗（はくりん）」四包
右の内一包ずつ試みに出す。
「斑鱗（ばんりん）」一包 試みなし。客なり。

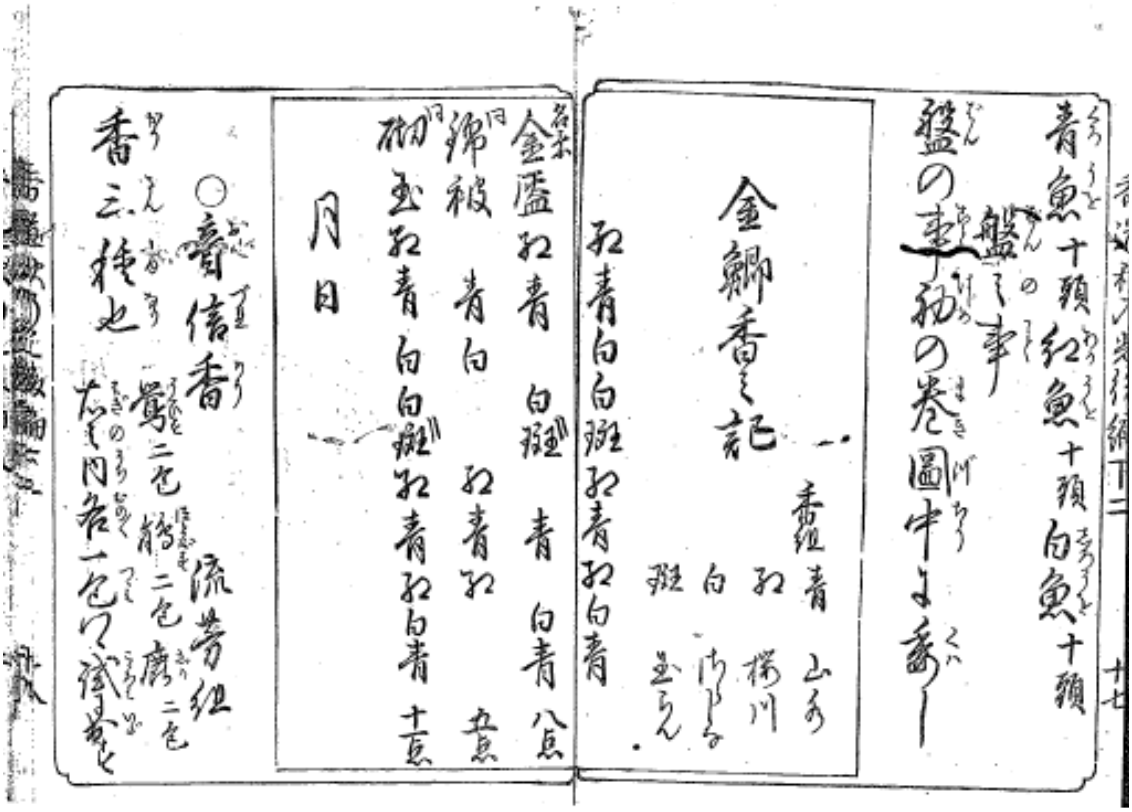


右試三包終りて、出香十包打ちまぜて
焚き出す。一炷ひらき。「ウ」一人聞三点、
二人より二点、餘は当たり一点ずつ。立物、
のすすむも点に同じ。立物、初めは「青魚(くろきうお)」、
五間目にいたりて「紅魚(あかきうお)」にとりかゆ。九間目
に至れば、また「白魚(しろうお)」に取りかゆ。早く向うにいたり
着きしを「勝」と定むべし。

札の紋

表「青」三枚　「紅」三枚　「白」三枚「斑」一枚　以上
十枚一人分。百枚にて十人分なり。
裏「金盃(きんかい)」「錦被(きんひ)」「鶴頂(かくちょう)」
「玉帯(ぎょくたい)」「八瓣(はちべん)」「砌玉(ぜいぎょく)」
「堆金(ついきん)」「蓮臺(れんだい)」「紅塵(こうじん)」
「隔断(きゃくだん)」
右の名目、金魚斑色の名儀、『花鏡』に
出でたり。因ってうつす。

立物の事



「青魚」十頭　「紅魚」十頭　「白魚」十頭

盤の事

盤の事、初めの巻、図中に委し。

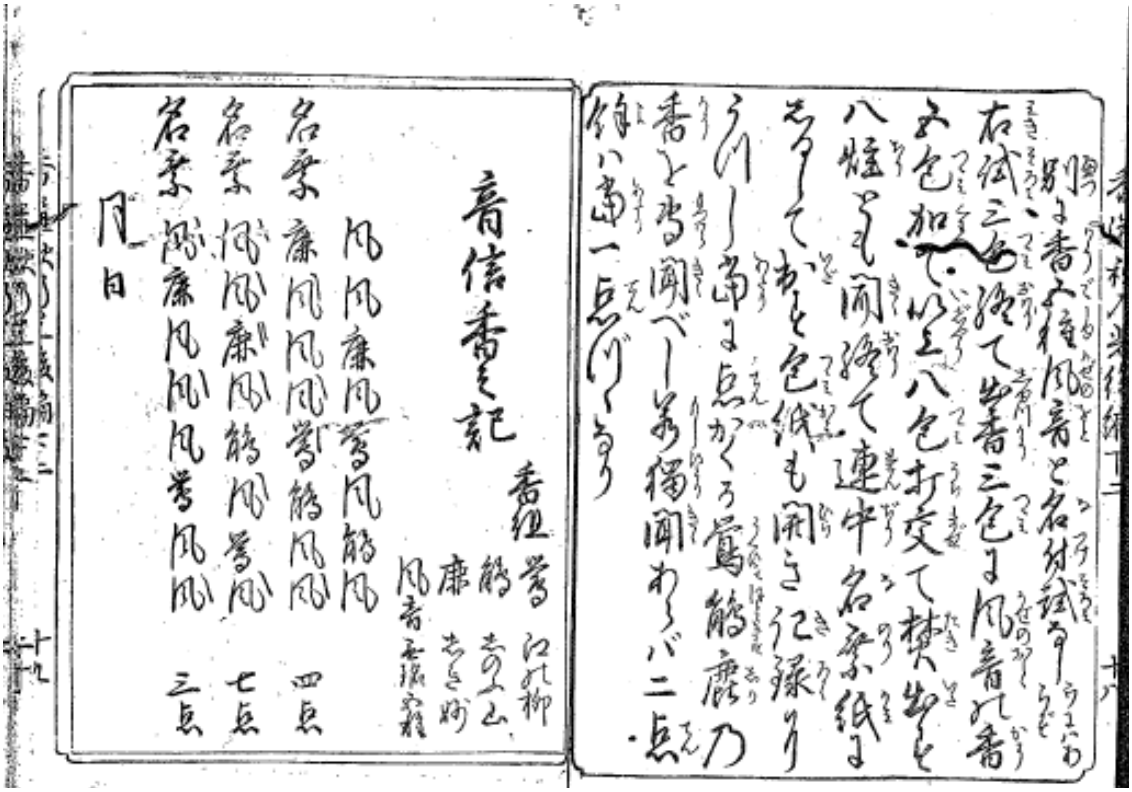
［金鯽香之記］

○音信香（おとずれこう）　流芳組

香三種也

「鶯」二包　「鵑（ほととぎす）」二包　「鹿」二包

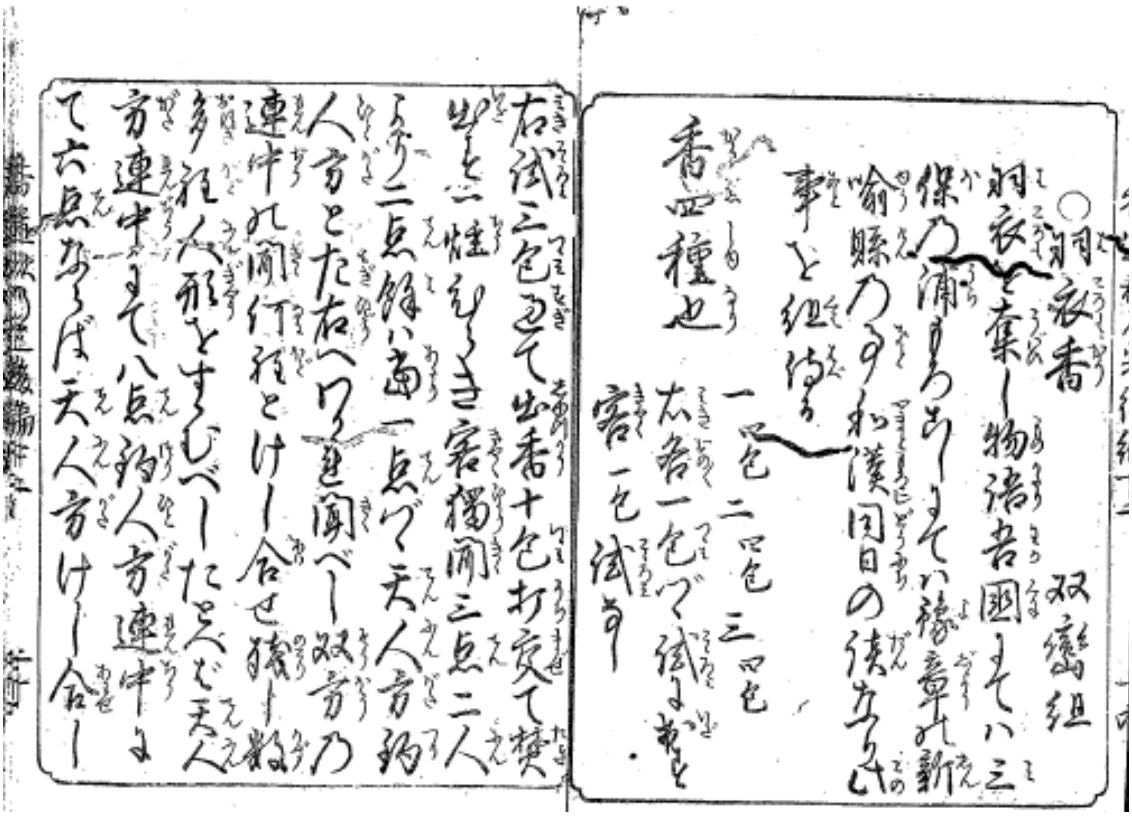
右の内一包ずつ試みに出す。



別に香五種「風音（かぜのおと）」と名付けて試みなし。
（「ウ」にはあらず。）

右試み三包終りて、出香三包に「風音」の香
五包加えて、以上八包打ちまぜて焚き出す。
八炷とも聞き終わりて、連中名乗紙に
しるして出す。包紙も開き、記録に
うつし、当たりに点かくる。「鶯」、「鵑」、「鹿」の
香を専ら聞くべし。もし、独聞あらば二点。
餘は当たり一点ずつなり。

［音信香之記］



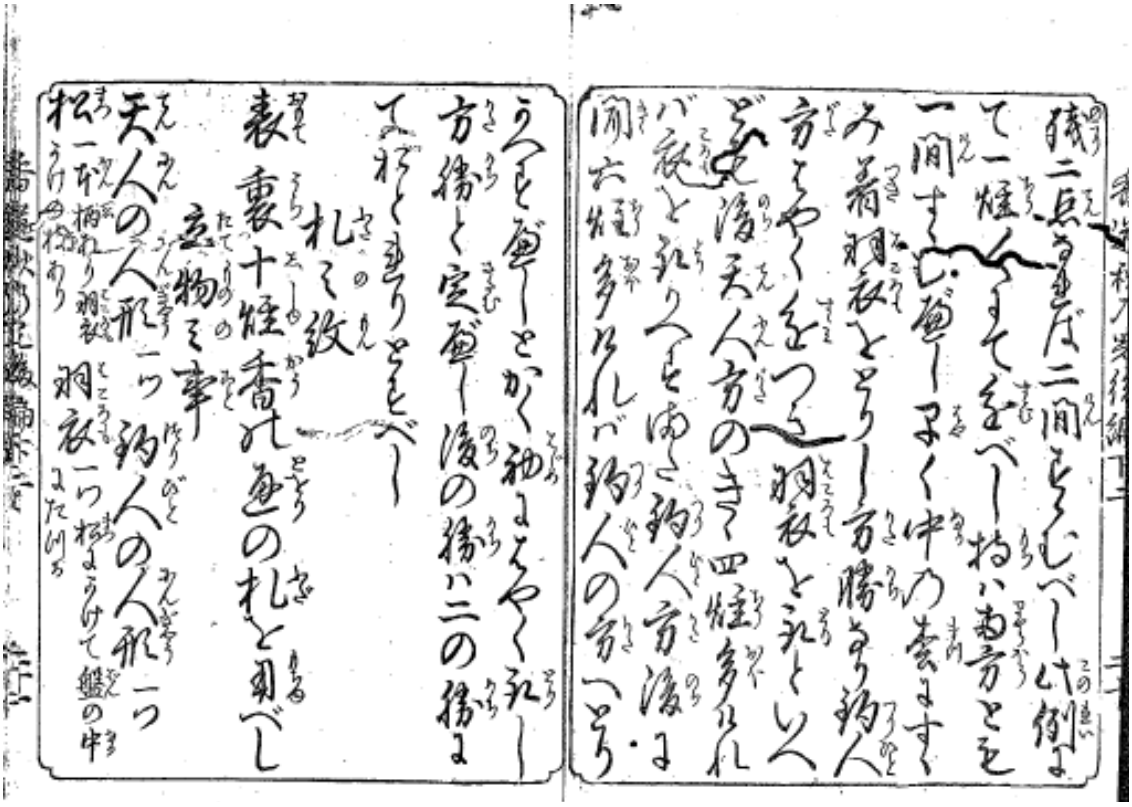
○羽衣香（はごろもこう）　双巒組

羽衣を奪いし物語、吾が国にては三保の浦、もろこしにては豫章（よじょう）の新喩縣（しんゆうけん）の事、和漢同日の談なり。此の事を組み侍る。

香四種也

「一」四包　「二」四包　「三」四包
右の各々一包ずつ試みに出す。
「客」一包　試みなし。

右試み三包過ぎて、出香十包打ちまぜて焚き出す。一炷ひらき。「客」独聞三点、二人より二点、餘は当たり一点ずつ。「天人方」「釣人方」と左右へわかれ聞くべし。双方の連中の聞き何程（なにほど）とけし（消）合わせ、残りし数多き程、人形をすすむべし。たとえば「天人方」連中にて八点、「釣人方」連中にて六点ならば、「天人方」けし合わせし



残り二点なれば、二間すすむべし。此の例にて一炷一炷にて進むべし。「持」は両方とも一間すすむべし。早く中の「松」にすすみ着き、「羽衣」をとりし方、勝ちなり。「釣人方」はやく進みつき、「羽衣」を取るといえども、後、「天人方」のきき四炷多ければ、衣を取りかえす。また、「釣人方」、後に聞き六炷多ければ釣人の方へとりかえすべし。とかく初めにはやく取りし方、「勝」と定むべし。後の勝ちは「二の勝」にて、おとれりともすべし。

札の紋

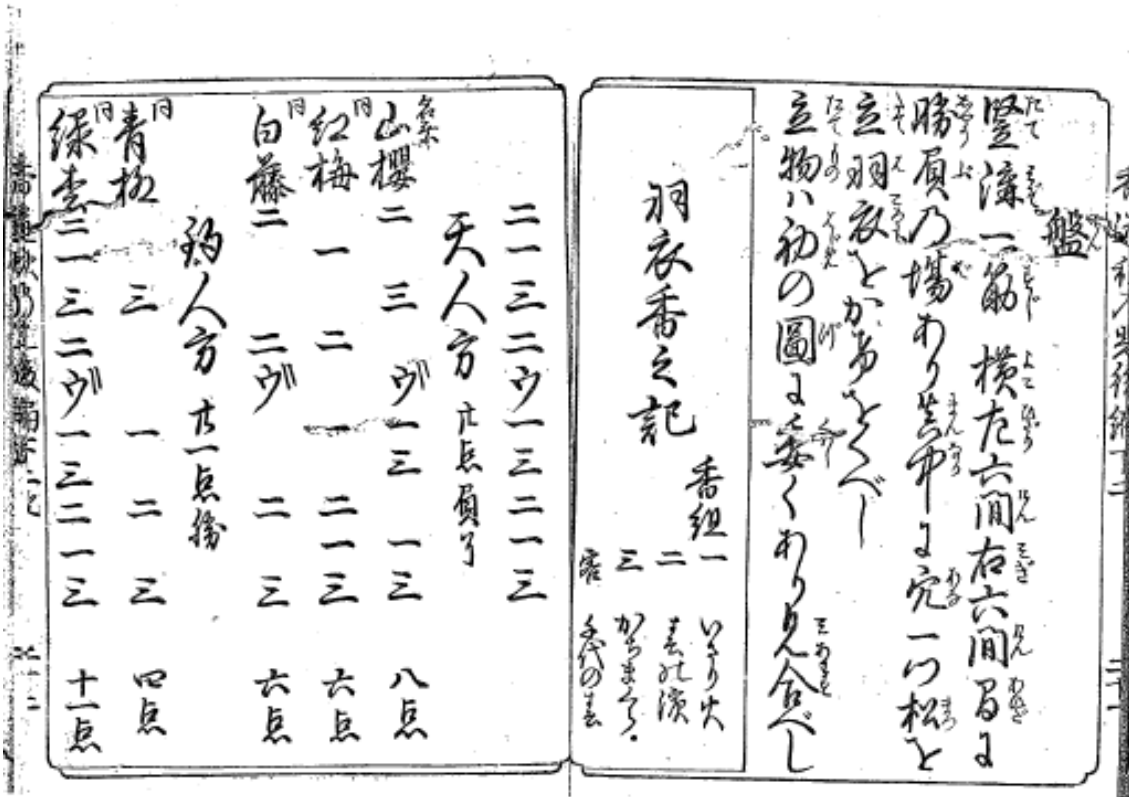
表裏「十炷香」の通りの札を用ゆべし。

立物の事

「天人の人形」一つ　「釣人の人形」一つ

「松」一本（柄あり。羽衣かけの枝あり。）

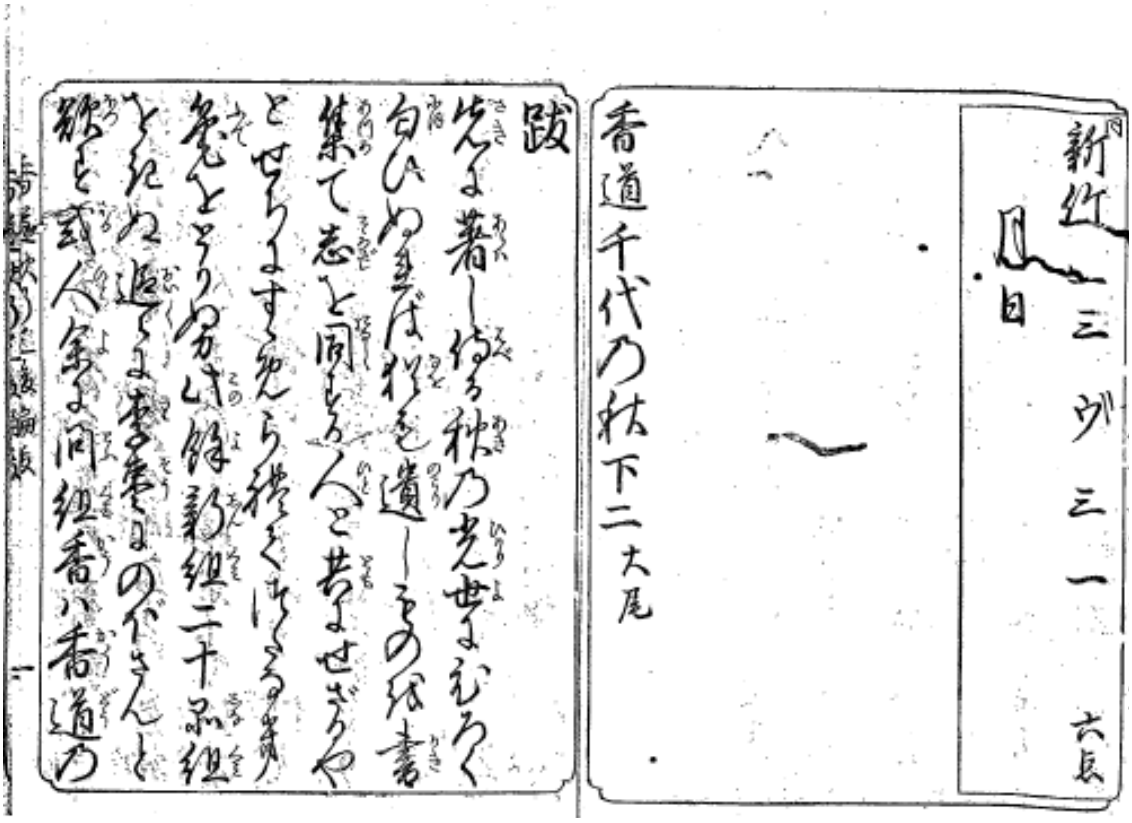
「羽衣」一つ（松にかけて盤の中にたつ(立)る。）



盤

竪溝一筋、横左六間右六間。間に
「勝負の場」あり。真中に穴一つ、「松」を
立て、「羽衣」をかけおくべし。
立物は、初めの図に委しくあり。見合わすべし。

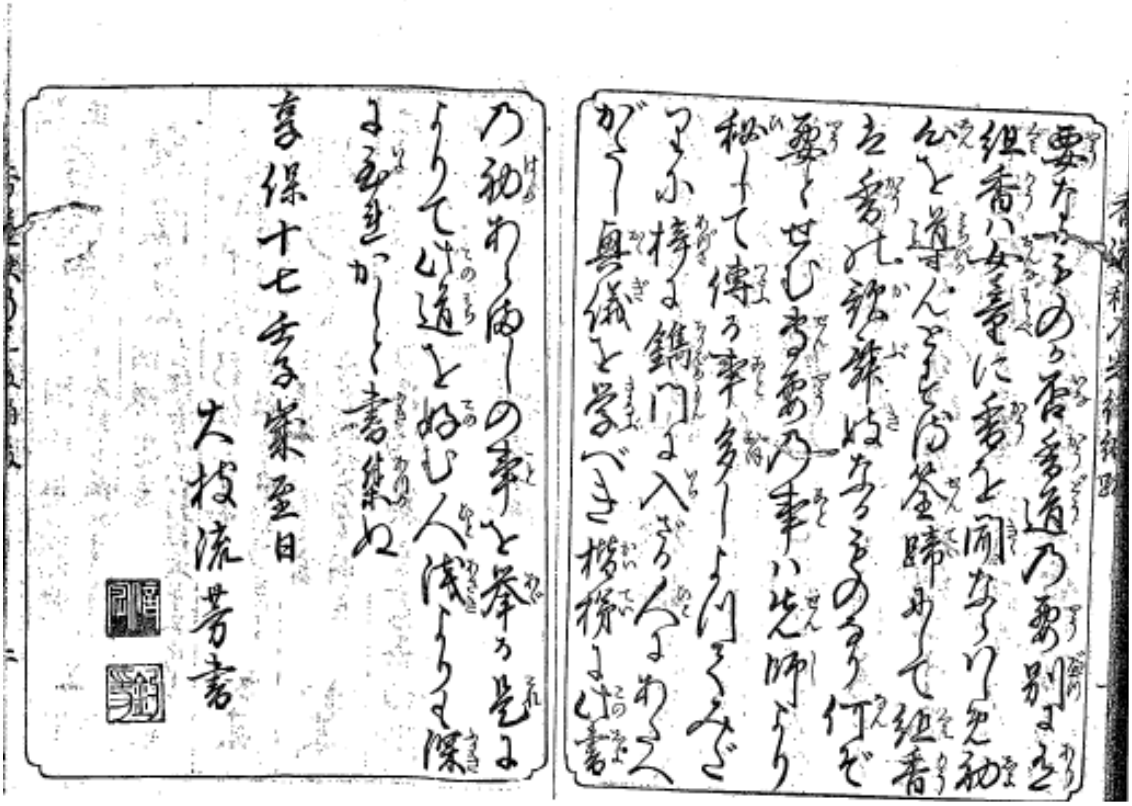
［羽衣香之記］



香道千代乃秋 下二 大尾

跋

先に著し侍る『秋乃光』、世にひろく
匂いぬれば、猶も遺りしものを書き
集めて、志を同じくする人と共にせざるや
と、せち(拙)にすすめられて、つたなき
筆をとりぬ。此の餘、新組二十品組
を記しぬ。追々に李棗(りそう)にのぼさんと
欲す。或る人、余に問う「組香は香道の

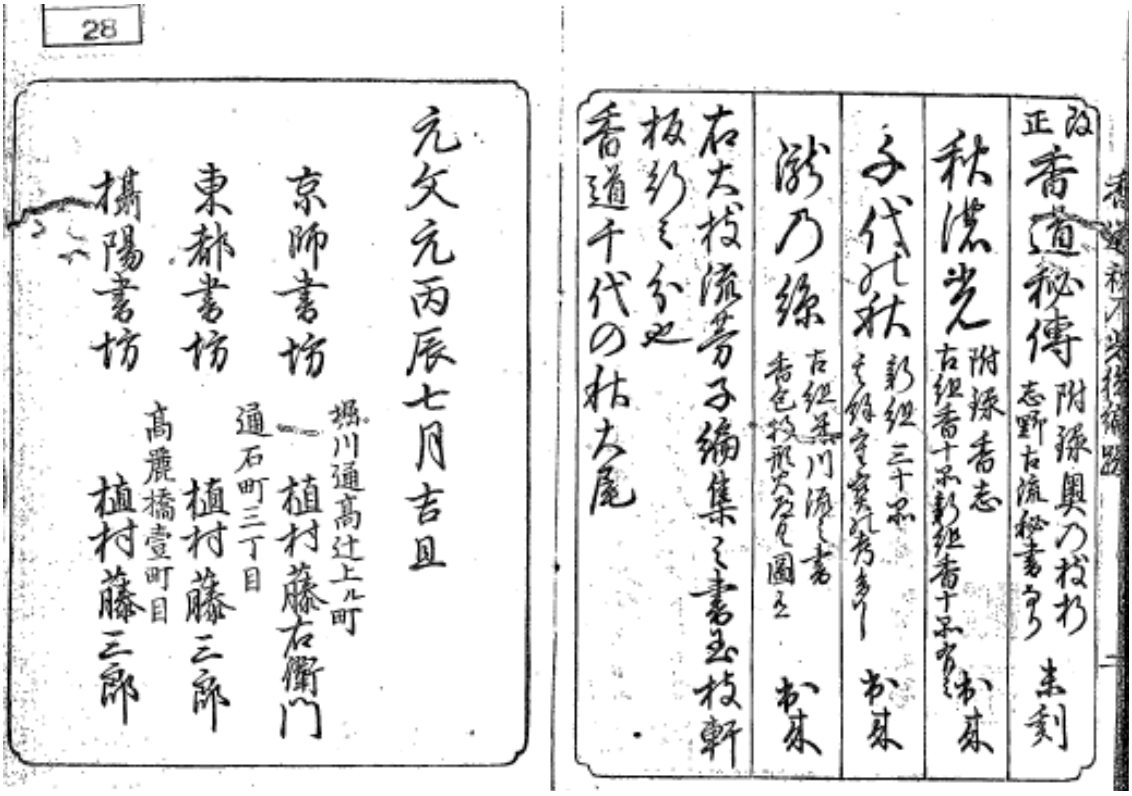


要なるものか。」否、香道の要、別に有り。
組香は女童に香を聞きならわしめ、初
心を導かんとする筌蹄（せんてい）にして、組香
は「香の歌舞妓」なるものなり。何ぞ
要とせん。専要（せんよう）の事は先師より
秘して伝うる事多し。よって、みだ
りに梓に鐫（ちりば）め、門に入らざる人にあたえ
がたし。奥儀を学ぶべき、楷梯に此の書

の初めあらましの事を挙ぐる。是に
よりて此の道を好む人、浅きよりも深き
に至れかしと書き集めぬ。

享保十七壬子歳至日
大枝流芳書

落款



改正　香道秘傳

附録奥乃枝折

志野古流秘書なり　　未刻

秋農光　附録　香志　古組香十品

新組香十品有り　　出来

千代の秋　新組三十品

その餘重寶の考多し　　出来

瀧乃絲　古組　米川流之書

香包折形火道具図盤　　出来

右、大枝流芳子編集之書、玉枝軒

板行之分也

香道千代の秋大尾

元文元丙辰七月吉旦

京師書坊　堀川通高辻上ル町　植村藤衛門

東都書坊　通石町三丁目　植村藤三郎

摂陽書房　高麗橋壹丁目　植村藤三郎

【凡例】

① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。

② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。

③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。

④ 青字の（）は、筆者の補足です。

⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年三月

『香筵雅遊』國井和裕